

# 父が見た海 1

## 戦後66年 ビートル号事件を追う

「お父さんはビートル号事件に遭遇したのでは...」。札幌の公益財団法人・秋山記念生命科学振興財団の理事長秋山孝二さん(60)は昨春、戦史に詳しい小樽市の知人との会話で、その事件の名を初めて聞いた。亡父・宏さんが戦時中、旧海軍の軍艦「利根」の乗組員だったことを知人に告げた時だった。

### 5年前に世界

5年前に90歳で亡くなった宏さんは、1917年(大正6年)に青森県で生まれ、海軍兵学校を卒業後、海軍将校として最前線に従事。復員後は妻・寿美さん(88)の美家が営む札幌の医薬品卸「秋山愛生館(現ススケン)」に入社し、75年から副社長を17年間務めるなど経営を支えた。

口数が少ない、学者



秋山愛生館副社長当時の宏さん(1977年7月撮影)

## 軍の汚点

肌の企業人として知られる一方、戦争には強いこだわりを持ち続けた。海軍兵学校同期の半数以上が戦死し、生き残ってしまった自分を常に意識していた。いくら酔っても軍歌は歌わない。ただ、かつて戦争を賞美しながら、戦後、急に反戦に転じたような人々は極端に嫌悪した。自分が直接見た戦争と軍隊の姿を、たびたび



父・宏さんのアルバムを手に、思い出を語る秋山孝二さん

び周囲に話して聞かせ強く興味を引かれた。「利根」が、インド洋での通商破壊作戦に従事中、英国商船ビートル号を撃沈した後、民間人らの捕虜65人を殺害した。戦後、戦犯として戦隊司令官が死刑、利根の艦長が懲役7年の罪に処された。

「海は語らない」といって戦隊司令官が死刑、利根の艦長が懲役7年の罪に処された。父の人生は会社より

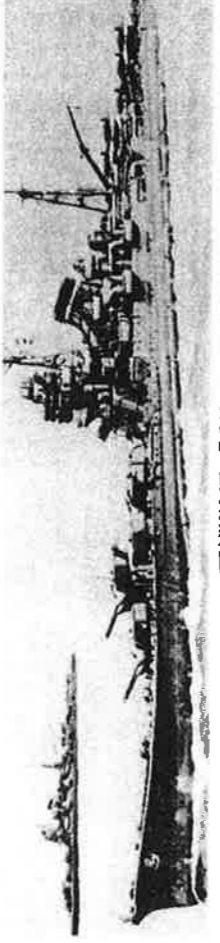
# 体験 最期まで語らず

も海軍時代に凝縮して読んで。父の名が、乗組員の一人として随所に出てきた。事件が起きたのは終戦前年の44年3月。旧海軍の南西方面艦隊第16戦隊所属の重巡洋艦

通信長として父は当時27歳。利根の約900人の乗組員の中で、8番目の地位となる通信長を務めていた。直接手を下す

に「通信長兼第六分隊長 大尉 野田宏」として養子入りする前の父の旧姓だ。はやる心を抑えて、一しをめぐった。する

と、利根と戦隊司令部との通信のやりとりを忖す箇所が、なぜか切り抜かれていた。ビートル号の捕虜殺害までの指揮命令にかかわる部分と想像され



重巡洋艦「利根」

た。通信長だった父は、このやりとりを知っていたに違いない。戦後、日誌が研究所に移される前、旧軍関係者が切り抜いた可能性がある、と後に聞いた。人けのない図書館で、秋山さんは事件の奥深さを感じていた。

◇ 「旧海軍の汚点」ともいわれるビートル号事件。インド洋の青い海で、父は何を見たのか。なぜ語らなかったのか。戦後66年たった夏。事件を追う秋山孝二さんを通じ、不条理な戦争の断面を探る。(報道本部の井上雄一、久保田昌子が担当し、5回連載します)

秋山孝二(あきやま・こうじ) 札幌市生まれ。札幌市で中学教諭を務め、79年に札幌に戻って秋山愛生館に入社。92年に社長に就任。98年に医薬品卸大手の「ススケン(名古屋)」と合併し、副社長に。02年に退社。現在は財団やNPOの活動を通じ、健康・環境など幅広い分野で取り組みを行う。

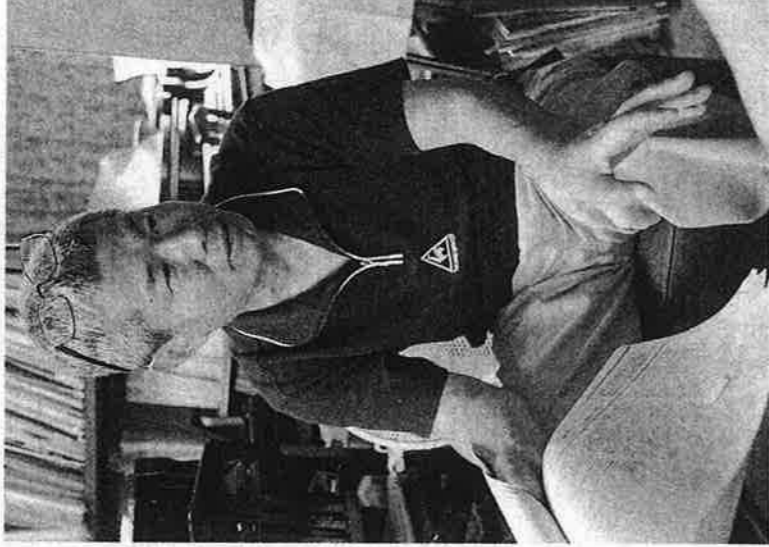
# 父が見た海 2

## 戦後66年ビハール号事件を追う

7月下旬、台風が過ぎた四国・松山は涼しい風が吹いていた。札幌の財団法人理事長秋山孝二さん(60)は、現地に住む青山淳平さん(61)を訪ねた。青山さんは長年、高校で教壇に立つ傍ら、戦記戦史など11冊の著書を持つ作家でもある。2006年には海軍の汚点ともいわれた歴史に埋もれかけていた英商船捕虜殺害事件に光をあてた。

### 口重い関係者

秋山さんが足を運んだのは、亡父・安さん



秋山さんが訪ねた松山市の自宅で、ビハール号事件について語る青山さん

が戦時中、海軍将校として遭遇した事件の詳細を聞くためだった。青山さん宅の応接間で、秋山さんが切り出した。「父は事件を語らないまま逝きました。青山さんがつな

## 撃沈

みな口が重かった。忘れようとしていました」  
 事件が起きた1944年(昭和19年)、東アジア海域に展開する旧海軍の南西方面艦隊は、戦況悪化を打開

するために新たな作戦を立てた。インド洋で活発化する敵国通商船の断絶を目的とした「サ号作戦」と命名された。司令官が指揮を執る艦隊「青葉」とともに、作戦の最前線を狙ったのが、

作戦は配下の第16戦隊(左近允尚正司令官)が担当。司令官の頭文字から「サ号作戦」と命名された。司令官が指揮を執る艦隊「青葉」とともに、作戦の最前線を狙ったのが、

安さんが通信長を務めた重巡洋艦「利根」(兼治舟艦長)だった。出航7日後の3月9日、利根は英商船ビハール号を発見し、奇襲を無視され、勢い余って撃沈してしまふ。救

重巡洋艦「利根」全長約200メートル、乗員約900人。葦原水雷艇隊の19隻が護衛に参戦した。

後、ビハール号事件に遭遇。シブツ海戦の後、広島・呉に停泊中の1945年7月、空襲を受けて大破し、戦後解体された。

利根。面艦の緊迫した通信は数日間続いた。3月15日、全艦がインドネシアのバタビヤ(現ジャカルタ)に帰港。左近允司令官ら戦隊司令部も、表向き利根に捕虜処分を促しながら、水面下で現地の捕虜收容所と交渉するなど捕虜の助命に尽力したとされる。結果的に捕虜40人余りは上陸を許され收容所に

しかし、利根側は混乱し、抗命罪の影にもおびえ、ついに残る捕虜65人の処分を決意。19日未明、スマトラ島の艦上で全員的首を切り、海に投棄した。司令部と利根との切迫するやりとりの接点に、通信長だった当時27歳の父はいたはずだ。「きそ、つらい立場だったでしょう」。

固く握った秋山さんの拳を見つめ、青山さんが言った。

# 捕虜処分迫る司令部

### 想定外の事態

捕虜の殺害や虐待は国際条約違反に当たる。青山さんによれば、戦隊の左近允司令官も

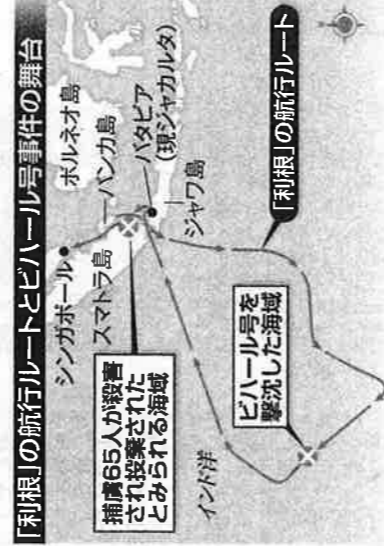
利根の艦長も、捕虜殺害は避けたいと思っていた。「船や物資など戦果が残れば、捕虜を生かしておく名目は残るのは想定外だった

そして、現場は口達指令の既縛に追い詰められていく。「捕虜は速やかに処分された

し」と迫る青葉の戦隊司令部。また尋問中である」と先延ばしする

ある」と先延ばしする

ある」と先延ばしする



「利根」の航行ルートとビハール号事件の舞台

捕虜65人が殺害され投棄されたとみられる海域

「利根」の航行ルート

「サ号作戦」における敵船捜索が終了

全艦がバタビヤ(現ジャカルタ)に帰港

捕虜のうち女性2人を含む15人を收容所へ移送

インド人の捕虜約30人を下船させ收容所へ

利根がシンガポールに向けバタビヤを出港

利根の甲板で捕虜65人が殺害され、遺体が海中に投棄される (青山淳平さん著「海は語らない」などによる)

「サ号作戦」の主な経過

1944年 3月2日 南西方面艦隊第16戦隊の旗艦「青葉」・重巡洋艦「利根」など7隻がインドネシアのハンガ島を出発

9日 利根が英商船「ビハール」号を発見、撃沈。捕虜約110人を收容。その後数日間におたり、青葉と利根とで捕虜の扱いをめぐる頻りに通信。「処分を」と促す青葉に対し、利根はためらぬ議論は平行線

12日 「サ号作戦」における敵船捜索が終了

15日 全艦がバタビヤ(現ジャカルタ)に帰港

16日 捕虜のうち女性2人を含む15人を收容所へ移送

17日 インド人の捕虜約30人を下船させ收容所へ

18日 利根がシンガポールに向けバタビヤを出港

19日未明 利根の甲板で捕虜65人が殺害され、遺体が海中に投棄される (青山淳平さん著「海は語らない」などによる)

命令トなどで逃げ出した乗員乗客約110人は救助され、利根艦内に收容された。肝心の物資などは沈む一方、残された大勢の捕虜。「これで現場の運命が狂った」と青山さんは言う。実はサ号作戦には、あらかじめ命令書面に残らないでいた。「情報入手が可能な着を際き、捕虜は速やかに処分せよ。

# 父が見た海 3

## 戦後66年ビートル号事件を追う

惨劇は1944年(昭和19年)3月19日未明に起きた。インドネシア・スマトラ島沖の旧海軍の軍艦「利根」の甲板上に、撃沈された英商船「ビートル号」の捕虜65人が、1人ずつ連れ出される。次々と首に軍刀が振り下され、遺体は真っ暗な海に投げ捨てられた。すべてが終わったのは約3時間後。甲板は血に染まっていた。

利根の元乗組員方木秀次さん(84)「滋賀県

高島市在住は当日、兵員室の入り口で捕虜が3、4人の日本兵に担がれ甲板に向かうのを見た。捕虜は命乞いの甲板上に、撃沈された英商船「ビートル号」の捕虜65人が、1人ずつ連れ出される。次々と首に軍刀が振り下され、遺体は真っ暗な海に投げ捨てられた。すべてが終わったのは約3時間後。甲板は血に染まっていた。

同じく元乗組員の吉田一男さん(87)「石川県小松市在住」も夜中に自室に戻る途中、甲板に2、3人の人影を見かけ、「ギャー」という叫び声を聞いた。

わったと思われる同僚に当時の状況を尋ねたが、「自分は寝ていた」などと誰ひとり関与を認めなかった。後ろめたさ、重苦しさが艦内を包んでいた。後に吉田さんは、実行役の同

### 呪縛

僚たちが酒をあおり、ぶるぶる震えながら務めを果たしたと聞いて、誰もが捕虜を殺すこと

その日まで、艦内のかかった。利根のトップ、幕府艦長は米国駐在の経験があり、捕虜にかかわった幹部フアン

# 命令拒否できぬ空気

になることは考えていなかった。利根のトップ、幕府艦長は米国駐在の経験があり、捕虜にかかわった幹部フアン

の公正な処遇を熟知すは、そろって優れた国

る。ビートル号事件にたのが。秋山さんは8月初め、札幌市で昭和史に詳しいインフ

命は、こうした意向を



戦時中の旧日本軍を取り巻く状況などを秋山さんに解説する保阪さん

札幌の財団法人理事長秋山孝二さん(60)の父・宏さんも当時、幹部将校として利根に乗っていた。秋山さんは生前の父の人柄からして「加害者としての姿勢はイメージできない。捕虜殺害には強い抵抗感を抱いたに違いないと思っている。大きくなるはずだ。敵の捕虜は情報を取れる一部を除いて処分せよ。第16戦隊は作戦遂行にあたり、そんな口頭の命令を受けていた。その1年前、当時の海軍軍令部トップは「敵の人的資源は血の一滴といえども殲滅せよ」と明言した。命令は、こうした意向を

クシヨウ作家保阪正康さん(71)「同市出身」と会った。

### 陸軍への意地

「日本の軍人は、個人の信条や理念を握り、命令はどんな内容であれ実行した。命令を拒否する考え自体がなかった」。保阪さんの説明に、秋山さんは

反映したものであった。当時の海軍中兵を覆っていた過激な空気の背景を、保阪さんは旧海軍は敵国と戦いながら、実は旧陸軍と激しいメンツ争いをしていた。陸軍の精神論的な体質に引きずられ、同じ玉碎型の発想に陥った」と解説した。

また、「海軍は不祥事の隠し方が、実は陸軍より巧妙だった」とも。上層部からの命令を口頭にとどめるなどして巧みに隠蔽し、現場に責任を負わせる。「ビートル号事件は、その典型的なケースでしょう」。保阪さんの言葉に秋山さんは、父が見た気がした。

# 父が見た海 4

## 戦後66年ビートル号事件を追う

札幌市の財団法人理事長の2人が被告人しなかつたでしょう。理事長秋山孝二さん(60)が裁かれた。父がこの旧海軍の若手将校としての父・安さんは終戦裁判で何を見ただかを知りたくて、秋山さんは2年後の1947年、香港で開かれたビートル号事件のB級戦犯裁判に、証人として召喚された。秋山さんが生まれる4年前のことだ。秋山さんの母・寿美さん(88)によると、約2カ月後に突然帰国した夫は「裁判のことは何も話さなかった」と言う。

裁判では、英商船ビートル号の捕虜殺害の舞台となった軍艦「利根」の艦長、作戦を指揮した第16戦隊の左近允尚正司令

官の2人が被告人しなかつたでしょう。秋山孝二さん(60)が裁かれた。父がこの旧海軍の若手将校としての父・尚正さんの背中を見ながら太平洋戦争に従事した尚敏さん(86)は、戦後海上自衛隊を経て、安全保障の専門家として活躍している。参謀ら命令否定「捕虜処分は軍令部の方針だった。それが

### 戦犯裁判

# 現場に責任押し付け

なければ、あれほど天と命じる口達指令があつた」と主張した。していない。証人として参謀らは、いずれも

な父を尊敬している」責任を追わせた戦犯裁判。その一部始終を、



ビートル号事件の戦犯裁判について語り合う左近允尚敏さん(左)と秋山さん

その存在を否定。法廷の論点は、被告人2人のどちらに責任があるかに矮小化された。結局、左近允司令官に死刑、艦長には懲役7年が言い渡された。尚敏さんは言った。「上からの命令だったとしても、父が現場で捕虜処分を命じたことは間違いない。父は裁判で釈明や自己弁護をしなかった。私はそん



左近允尚正・第16戦隊司令官(尚敏さん提供)

「反対尋問なく」上層部の指揮命令を覆い隠し、現場だけに絞首刑に処された。家族に宛てた最後の手紙には「敗戦したがためう。秋山さんは、事件を探る中で入手した左近允司令官の弁護人の手記から、父に関する記述を見つけた。

「野田(父・安さんの旧姓)利根通信長が証人に立つ。別に反対尋問もなく、簡単に通す」。文面から証書内容には「勝者の報復のためだけに行われた裁判でしようから」

「勝者の報復のためだけに行われた裁判でしようから」

また、勝者が敗者を裁く戦犯裁判の矛盾も、父は感じていた

「勝者の報復のためだけに行われた裁判でしようから」

ではないか。当時は連合国側も、民間船を攻撃するなど国際条約違反に問われるべき行為を繰り返していた。

裁判で左近允司令官に寄り添った弁護人は、手記で「最初から左近允氏を極刑に処することを予算にしていた。名ばかりの裁判である」と、結論ありきの裁判進行に強い不満を書き残している。

秋山さんは尚敏さんに尋ねた。「結局、裁判に正義はあつたのでしょうか」。尚敏さんは首を振り、短く答えた。「勝者の報復のためだけに行われた裁判でしようから」

ではないか。当時は連合国側も、民間船を攻撃するなど国際条約違反に問われるべき行為を繰り返していた。

# 父が見た海

5

戦後66年「八丁丸」号事件を追う



父・安さんが好きだった「海」と口ぐせの「忍」の字が入った墓石の戒名を眺める秋山さん

財団法人理事長、秋山孝二さん(60)は、調べを進めるうち、実は父が生前、事件をめぐる

父が旧海軍時代に遭遇した「八丁丸」号事件を追っていた札幌の

父・安さんが好きだった「海」と口ぐせの「忍」の字が入った墓石の戒名を眺める秋山さん

財団法人理事長、秋山孝二さん(60)は、調べを進めるうち、実は父が生前、事件をめぐる

父が旧海軍時代に遭遇した「八丁丸」号事件を追っていた札幌の

## タブー

# 消えぬ苦悩 心の底に

像し「背筋が凍るよ

その立場だったら想像したのではない。見たことこの悲惨さゆ

44年(昭和19年)3月の事件前夜、軍艦「利根」の士官室で、捕虜処分の実行責任者を命

05年春、戦記雑誌に載った右丸さんのレポートによると、秋山さんの父・安さんは19

体験を人に語っていた事実を知った。2006年に90歳で亡くなる数年前、愛媛県在住の戦史研究家、石丸浩明さん(89)の取材に応じ

心のおたかまり、苦悩

万木さん自身、今も取り乱

の戦友会でも事件は一切話題にならなかつた、と振り返る。「あまりに残酷で、みんな胸にしまっておかなあかん」と思ってたんや

元乗組員万木秀次さん(84)「滋賀県在住」は、毎年行われる利根

な思っていたと記されている。石丸さんは、安さんが「質問に一つ一つ慎重に答えていた」と振り返る。当時、安さんは、関係者の胸に深い

取り乱

共闘運動の最盛期、友人たちと連れ立ち各地

秋山さんは、父が亡くなる数年前、入院中のベッドで夜中に訪ねた。墓前で手を合

軍中央の命令に轉らしたあかんのや」。戦争が終わって半世紀以上。父の胸にも戦場の恐怖、苦しみが刻

えに、語れなかったのではないかと記されている。石丸さんは、安さんが「質問に一つ一つ慎重に答えていた」と

取り乱

共闘運動の最盛期、友人たちと連れ立ち各地

秋山さんは、父が亡くなる数年前、入院中のベッドで夜中に訪ねた。墓前で手を合

元乗組員の吉田一男さん(87)「石川県在住」も「戦争が悲惨なのは

は消えないという。こうした姿に衝撃を受けし、区戦平和を訴えた。

取り乱

共闘運動の最盛期、友人たちと連れ立ち各地

秋山さんは、父が亡くなる数年前、入院中のベッドで夜中に訪ねた。墓前で手を合

元乗組員万木秀次さん(84)「滋賀県在住」は、毎年行われる利根

は消えないという。こうした姿に衝撃を受けし、区戦平和を訴えた。

## 悲惨さ伝える

7日、秋山さんは安

「おわり」

それが、これからの私の使命です」

わりに、秋山さんは墓石に語りかけるように言った。

父は何も言わず見守っていた。そんな父の心の奥底に沈んでいた

し、区戦平和を訴えた。だが、いま当時を振り返ると、「戦争を知らない世代だから、戦争を知ることから逃